1日目
13:05

【演習】

障害特性の理解とプランニングⅠ

ー日中活動場面における支援の手順書を作成するー

この時間の目的

行動障害が頻発する要因の一つに、対象者の状態にそぐわない活動（生活環境）ということが考えられます。この時間は、生活介護事業所で強度行動障害のある人に日中の活動を提供する場面を想定し、自閉症や知的障害の障害特性に配慮した**「支援の手順書」を作るプロセスを学びます**。

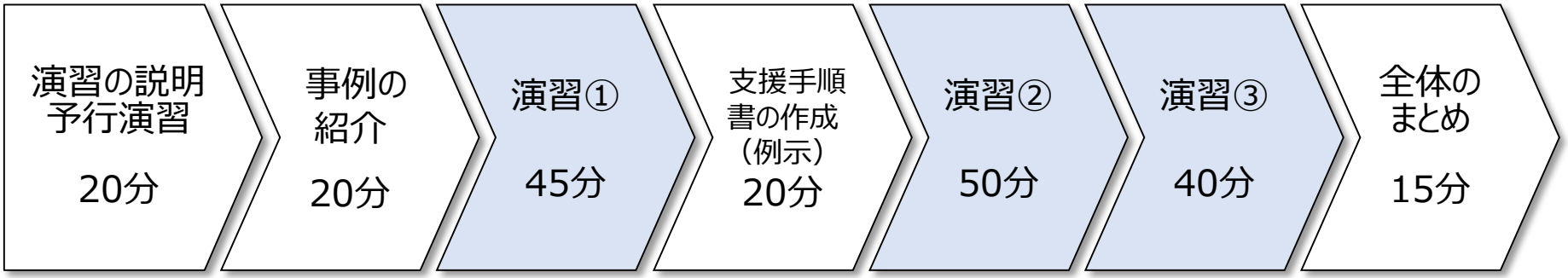
【ポイント】

① 実際に起きたことや本人の行動を客観的に捉えましょう。

② 自閉症や知的障害の障害特性と環境との相互作用に着目し、行動が起きている背景（障害特性）について、しっかりと考えてみましょう。

③ 本人の強みや好みを活用して具体的な支援の方法を検討しましょう。

この時間の流れ



<u>演習①</u>：高崎のぞむさんの事例を読み、昼食場面での「背景の障害特性」を考えてみましょう。

<u>演習②</u>：班別活動時の、「強みを活かした新たな環境」を作成しましょう。

演習③：班別活動時の、「支援手順書」を作成しましょう。

演習に入る前に｜演習の流れ

- この研修における演習は、原則この流れで進めます

  演習の説明　→　グループディスカッション　→　発表とまとめ

- グループで演習を進めるにあたっての注意点は、

  ①　時間厳守

  ②　演習の説明で内容をしっかり理解する

  ③　役割を明確に（司会、記録、発表等）

  ④　グループディスカッションは、テーマに沿って

- グループディスカッションは積極的に

  ①　司会者はタイムキープしながら、グループ全員の意見を引き出すよう努力して下さい

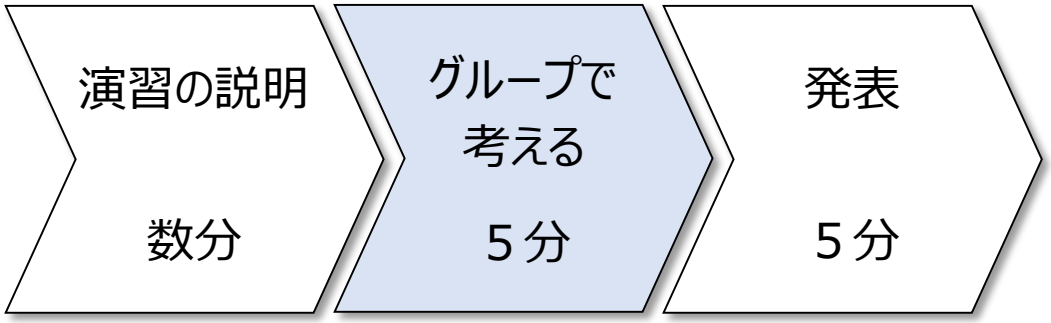
  ②　ディスカッションは、テキストに記された「テーマ」についてグループ内で意見交換するものです（自由な討論ではありません）

  ③　記録者は要約筆記を行い、発表者にディスカッションの要旨を的確に伝えて下さい

予行演習｜グループ名を決める

- 「司会」を③、「記録」を⑤、「発表」を②の人が担当します。
- はじめにグループ名を決めます。
- 記録者は、グループ名と、その理由を簡潔にまとめて下さい。
- 発表者は、記録者から記録された用紙をもらい、発表するための心の準備をしておいてください

【演習の流れ】



予行演習｜グループ名を決める

5分 【グループ】

1. グループ名を相談し、決めます。

5分 【発表】

2. ２～３のグループに発表してもらいます。

予行演習｜発表（５分）

２～３グループに発表してもらいます。発表者はグループで話し合われた内容を全体に報告してください。

- グループ名
- なぜ、そのグループ名を選んだのか？

事例の紹介｜資料の確認

「情報シート」（資料）の内容を確認します。

- 高崎のぞむさんの生育歴
- サービス等利用計画【要約】
- サービス等利用計画【週間計画表】
- 個別支援計画
- 生活介護事業所「あじさい」
- 支援の留意点
- 追加情報
- 行動援護計画
- 行動援護を利用したのぞむさんの外出

事例の紹介｜高崎のぞむ さん

「情報シート」を読みます（20分間）

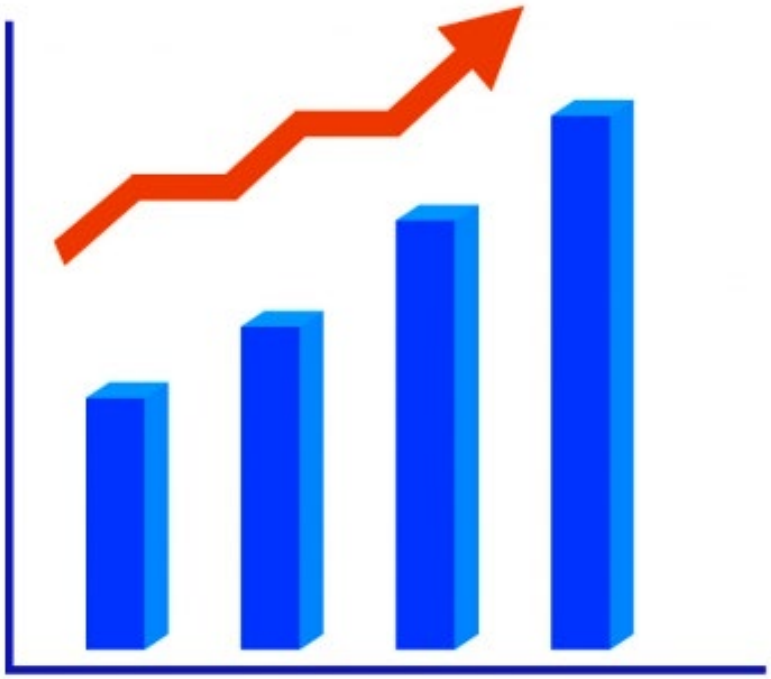
1. これから高崎のぞむさんの情報シートの中から、次の２つを読みます。
   - 高崎のぞむさんの生育歴
   - サービス等利用計画【要約】

2. 「強み」を意識しながら、のぞむさんの状態像をイメージしましょう。
   （アンダーラインが引いてある箇所が、強みの部分です）

事例の紹介｜高崎のぞむさん

「高崎のぞむ」さんは26歳の男性です。
現在は、父親と母親と一緒に自宅で生活しています。
のぞむさんには４歳上の姉がいます。姉は２年前に結婚し、家を出ています。

事例の紹介｜大柄なのぞむさん



身長172㎝
体重105kg
高血圧気味

のぞむさんは大柄で、身長が172センチ、体重が105キロあります。10年程前は60キロ少々でしたが、毎年コンスタントに増えてきています。最近は高血圧気味で、内科医から指導を受けていますが、家庭での対応は難しいです。

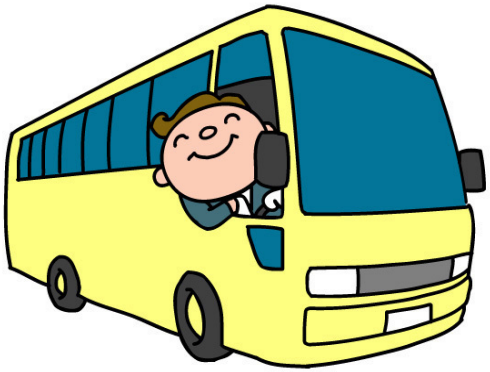
事例の紹介｜出生～１歳半

生まれたばかりののぞむさんは元気な赤ん坊で、母親は姉よりも手のかからない子だと思っていました。しかし、発語が遅く、１歳半になっても大声で泣き続けるか、口をモグモグするだけで、言葉を発することはありませんでした。

事例の紹介｜幼児期

小児科や保健師の紹介で、市内の療育訓練や相談窓口に通い、３歳からは同じような障害のある幼児たちが通う通園施設に毎日行くことになりました。
医師から、知的な発達の遅れと自閉症と診断されたのは４歳の時でした。

事例の紹介｜学童期（小学生）



簡単な単語を話すようになったのは、小学校に通い始めた頃からです。
学校は、当初、地域の学校の特別支援学級に通っていましたが、５年生からスクールバスを使って特別支援学校に通うようになりました。

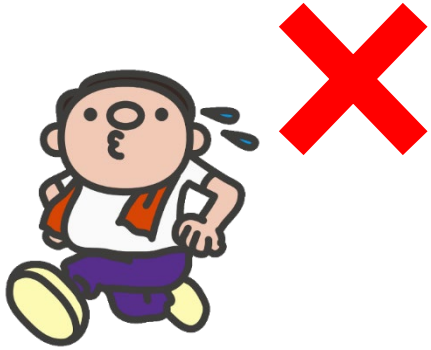
事例の紹介｜当時の家族の不安

当時を振り返ると、道路工事現場や子どもの泣き声といった極端に嫌いなこともありましたが、家族としては、将来に対して漠然とした不安を感じていたようです。

事例の紹介｜コンビニ事件

生活が変わったのは、特別支援学校の中等部の２年生からです。近所のコンビニで、親子で買物に来ていた３歳位の子どもを突き飛ばして、ケガをさせてしまったのです。警察もやってきて母親が事情聴取を受けることになりました。

事例の紹介｜これまでの生活が･･･



のぞむさんは、事の重大さをわかっている素振りもありませんでした。家族は、のぞむさんを連れて近所に出かけられなくなりました。外出は、月に１～２回、車でドライブに出かけ、比較的広々とした郊外で少し散歩をすることがやっとでした。

事例の紹介｜中学→高校→卒業

- 頭突き
- つねる
- 大声
- 床をﾄﾞﾝﾄﾞﾝ

次第に、断続的に唸るような大声をあげたり、ドンドンと床を強く踏み鳴らしたり、高校生になった頃には他害が目立つようになりました。高校卒業後は作業所へ通所しましたが他害が原因で１年半で退所になりました。

事例の紹介｜20歳～現在

しばらく在宅生活を送った後、20歳から現在まで生活介護事業所「あじさい」に通うようになりました。あじさいでは、真剣に職員同士で検討して支援を行われ、通所中や家庭内では、以前より少しずつ行動が落ち着いています。

事例の紹介｜家族の思い

のぞむさんの両親は、のぞむさんに深い愛情があり、今も、親としてできる限りのことをやり続けたいと考えています。それはのぞむさんの服装や、持ち物に書かれている名前を見ると分かります。週末のドライブも10年以上毎週続けられています。

サービス等利用計画｜要約

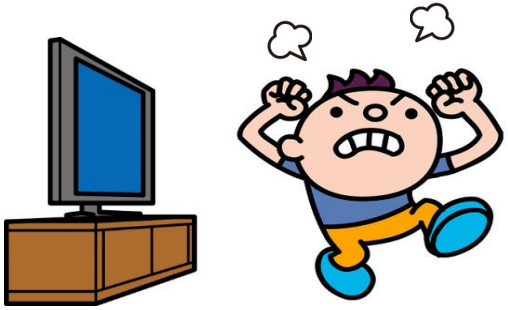
■サービス等利用計画【要約】を読みます。

■アンダーラインが引いてある箇所は、のぞむさんにとっての”強み”になります。

■どんな強みを持っているのか、一緒に確認をしましょう。

インテーク｜情報の収集・整理①

- 26歳男性　自閉症　重度知的障害
- 身長172センチ 体重105キロ
- 高等部卒業後、8年間で45キロ体重増加
- 高血圧(100-160)
- 14歳の時に近所のコンビニで3歳の子を突き飛ばし怪我をさせている
- その後も学校や施設の外出中に幼児の方に向かっていく場面を数回制止している
- 子どもの泣き声はテレビから聞こえても不機嫌
- 外出は、施設の送迎と父親がドライブに連れていく以外に外出経験なし



インテーク｜情報の収集・整理②

- DVDカセットのセット作業や洗濯ばさみの袋詰作業など、単純な工程の仕事が可能
- 書類やチラシの封入等、手先の巧緻性が求められる作業は手順の学習は可能だが、製品としての完成は難しい
- 個別化された作業環境だと、一度に20分から日によっては1時間近く継続して作業に取り組むことが可能

インテーク｜情報の収集・整理③

- 休憩時間は他の利用者や職員の動きが見える環境だと落ち着かなくなるため、静養室のソファーで横になっている場合が多い

- 静養室での活動は特になく、長時間休憩が続くと不穏状態になり、頻繁に静養室を出入りし、床を強く踏みならしはじめる

インテーク｜情報の収集・整理④

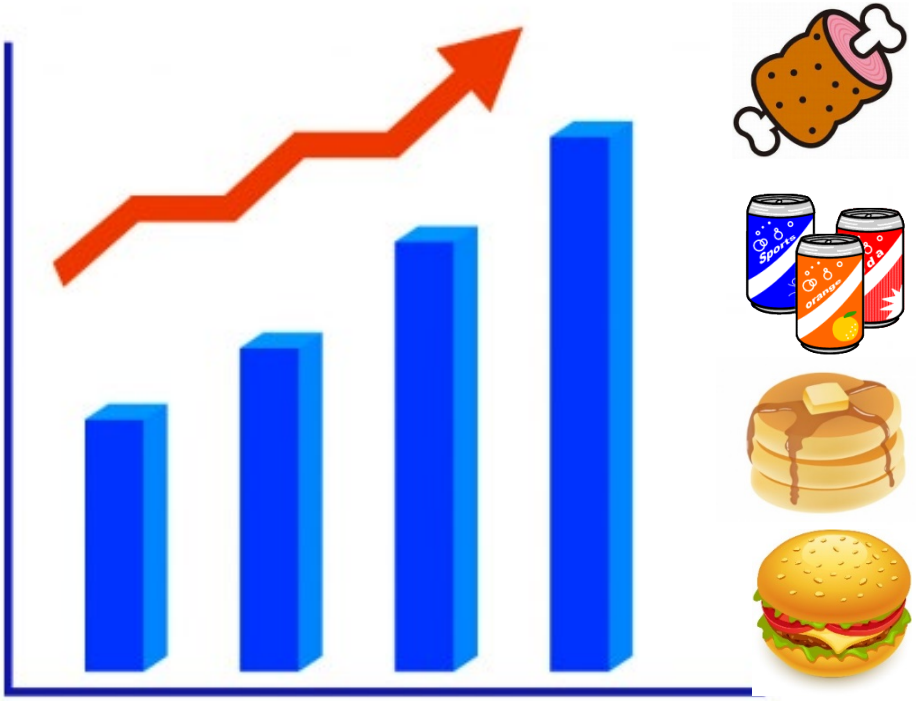
- 写真を使った指示で活動がいくつか理解できている

- ときどき笑顔を見せ、支援員に近寄ってくることがあるが、しばらくしてから興奮状態になる場合もある

インテーク｜情報の収集・整理⑤

- 入浴や歯磨き(うがい)が1時間以上たっても終わらないことが多々見られる
- 2か月前、歯磨きの中止を指示した父親に、コップを投げつけ、目に大けがを負わせる(その後休日のドライブが行けていない）。

アセスメント｜生物的なこと①



- 中学生から強度行動障害の状態が続いている重度知的障害のある自閉症
- 生活習慣病の対策が必要
- 健康・衛生に配慮した詳細な援助は行いづらい

アセスメント｜生物的なこと②

●とっさに乳幼児を突き飛ばすリスクがある　●女性や子どもの甲高い声は嫌い
●混乱し興奮すると数時間単位で不穏状態が続き、場合によっては周囲の人がケガをするリスクがある

アセスメント｜心理的なこと①

- 一人で行う作業や自立課題は20分程度集中して取り組む
- とっさに何らかの慣れ親しんだ行動を取ろうとする時に制止すると興奮することが多い(大声・床を踏みならす・頭突き等に表れる)
- 周囲の人のとっさの動きに反応し興奮することがある

アセスメント｜心理的なこと②

- 刺激が少ない場所で、一人でいることを好むが、30分以上続くと興奮することがある
- 笑顔や人との関わりを求める行動がかならずしも快適な状況の表現とは限らない
- 歯磨きや入浴といった活動の終了が理解できない

アセスメント｜社会的なこと

- 両親は愛情をもって接しているが、今後も長期間この生活を続けることの困難さを感じている
- 家庭以外での外泊経験は15年以上経験していない
- 2年を目処に複数箇所のグループホームの設置が検討されている

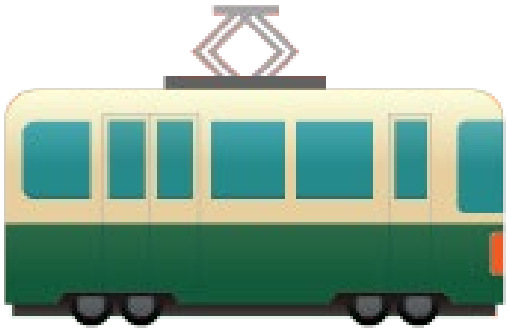
導き出された課題①｜プランニング

【支援目標】ダイエットと生活習慣病予防

【支援計画】

- 昼食に満腹感を与える低カロリーメニュー
- 日中活動に毎日散歩の時間を組み入れる(時間や歩行距離は計画的に増やす)
- 休憩時間に個別に深呼吸の練習

導き出された課題②｜プランニング



【支援目標】支援付きの外出手段の確保

【支援計画】

- 相談支援事業と行動援護利用の調整(早急のサービス開始に向けて)
- 行動援護事業所と具体的な支援方法の確認
  (支援員が複数回同行予定)

導き出された課題③｜プランニング

【支援目標】
穏やかに日中活動の時間を過ごす

【支援計画】

- 1日に作業1種類、自立課題6種類を準備
- 1日単位の個別のｽｹｼﾞｭｰﾙを当面固定
- スケジュールの伝達方法を調整
  - ・スケジュールの提示場所は静養室
  - ・3つ程度の活動を写真・カードで提示
  - ・静養室の休憩時間の終わりはタイマー
- スケジュールの変更時には家庭に連絡
  - ・家庭での影響を確認

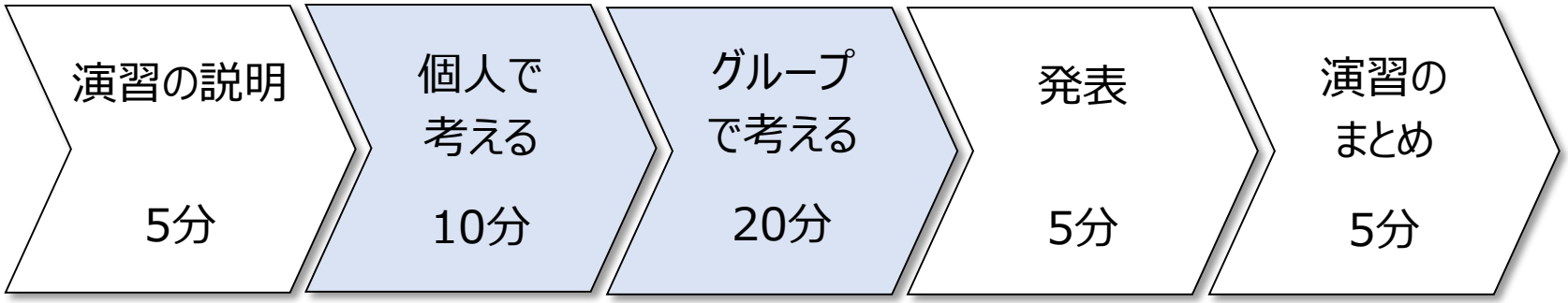
導き出された課題④｜プランニング

【支援目標】定期的なショートステイの利用
【支援計画】
月に2回(各1泊)生活介護事業所併設のショートステイを活用(要調整)
・曜日の固定　・他の利用者との調整　・宿泊時に必要なものを確認　・夜間と早朝のスケジュールを確認　・最初の実施日

演習①｜障害特性を考える

- 引き続き、「司会」を③、「記録」を⑤、「発表」を②が行って下さい。
- エピソード「いつも人の食事を…」を読み、行動の背景にある障害特性を考えてみましょう。

【演習の流れ】



演習①｜いつも人の食事を…

- のぞむさんが通っている生活介護事業所「あじさい」では、11:00前くらいからご飯の炊ける匂いとお味噌汁の香りがしてきます。昼食は業者にお願いして料理は配達してもらいますが、「できるだけ家庭的な雰囲気を味わってもらいたい。」そんな思いで、ご飯とお味噌汁だけは職員が毎日準備をしています。
- 11:45から12:45の間に各自が昼食を食べに食堂に来ます。午前の作業や活動を終えて少し休憩をしてから食べに来る人もいますが、多くの人は活動が終わるとすぐに食堂へ入ってきます。のぞむさんも午前の班別活動が終わると、すぐに食堂へ行き昼食を食べ始めます。
- いつもの席で食べているのぞむさんですが、食事の配膳をしている職員は気になっていることがありました。それは揚げ物や果物など、のぞむさんが好きなメニューだと、人の食事をとって食べてしまうことでした。今日はのぞむさんの大好きなハンバーグです。あっ！目の前の人のハンバーグを見ている…
- 人の食事を食べた時は、すぐに「それは○○さんの食事です。」と注意しますが、一向にお構いなしで食べ続けます。また制止しようとすると、大きな声を上げて頭突きや押してくることがあります。勿論、とられた利用者もカンカンです。言っても分かってもらえないし……どうしたらいいんだろう？

演習①｜いつも人の食事を…

右上の写真は、エピソードの日の昼食です。メニューは、ご飯、味噌汁、漬け物、副菜（ハンバーグとサラダ）です。その下の写真は、「あじさい」の食堂です。のぞむさんはいつも、８人掛けの机の決まった場所で昼食を食べています。

のぞむさんが食べているときは、この机は８人の利用者が食事を食べられています。８人分の食事が机に並ぶので、机の上はお皿（食事）で一杯になります。

これから、のぞむさんの昼食時の課題（人の食事を食べてしまう）について整理し、根拠に基づいた支援の手順書を考えてみましょう。

演習①｜障害特性を考える

・好きなメニューが出ると、他者のおかずをとって食べる
・制止すると、誰彼構わず人の腕をつねる、噛みつく

本人の障害特性

■

■

■

■

環境・状況の影響（環境要因）

□一斉に利用者が食事を開始する（ざわざわした環境）

□机の上が８人分の食事で一杯になり、煩雑な状態（自分の食事と他の人の食事が分かりずらい）

演習①｜障害特性を考える

10分 【各自】

1. エピソード「いつも人の食事を…」をもう一度読み、のぞむさんの行動の背景にある障害特性について、ワークシート（WS-１）に書いてみましょう。
   ※ヒントシートも、参考にしてください

２０分 【グループ】

2. １）書いた障害特性を、各自グループ内で発表
   ２）グループ内で障害特性をまとめる

5分 【発表】

3. ３つのグループに発表してもらいます

演習①｜発表（５分）

２～３グループに発表してもらいます。発表者はグループで話し合われた内容を全体に報告してください。

- 背景の障害特性を発表して下さい
- なぜそう思ったのか、根拠となる部分を教えて下さい

演習①｜氷山モデルで考える

・好きなメニューが出ると、他者のおかずをとって食べる
・制止すると、誰彼構わず人の腕をつねる、噛みつく

本人の障害特性

■特定の感覚が過敏、または鈍い
■結果をかえりみず突然反応してしまう
■全体をとらえて関係性をつかむことが苦手

■ことばを聞いて理解することが苦手

環境・状況の影響（環境要因）

□一斉に利用者が食事を開始する（ざわざわした環境）

□机の上が煩雑な状態（本人と他の人の食事が分かりにくい）

□声かけで制止

支援手順書の作成｜モデル演習

■これから、のぞむさんの昼食場面での支援手順書の作成方法（考え方）について、一緒に見ていきます。

⇒　作成の流れと支援手順書を例示します。

■これから紹介する４つのプロセスを意識し、支援手順書作成までの考え方を理解しましょう。

支援手順書｜「４つのプロセス」で考える

観察・予測｜日々の生活状況やアセスメントシート等から情報を収集

生じている問題・生じうるリスクを具体的に記す

① 背景の障害特性を推測｜氷山モデル

行動の背景にある障害特性（生物学的・心理的）と環境要因を推測し、リストアップする。

② 障害特性を「強み」の表現に変換

リストアップした障害特性を「強み」の表現に変換する 。

③ 他の場面から「強み」のリスト追加

他の場面の観察から、リストされていない「強み」を加える。

④ 「強み」を活かした新たな環境

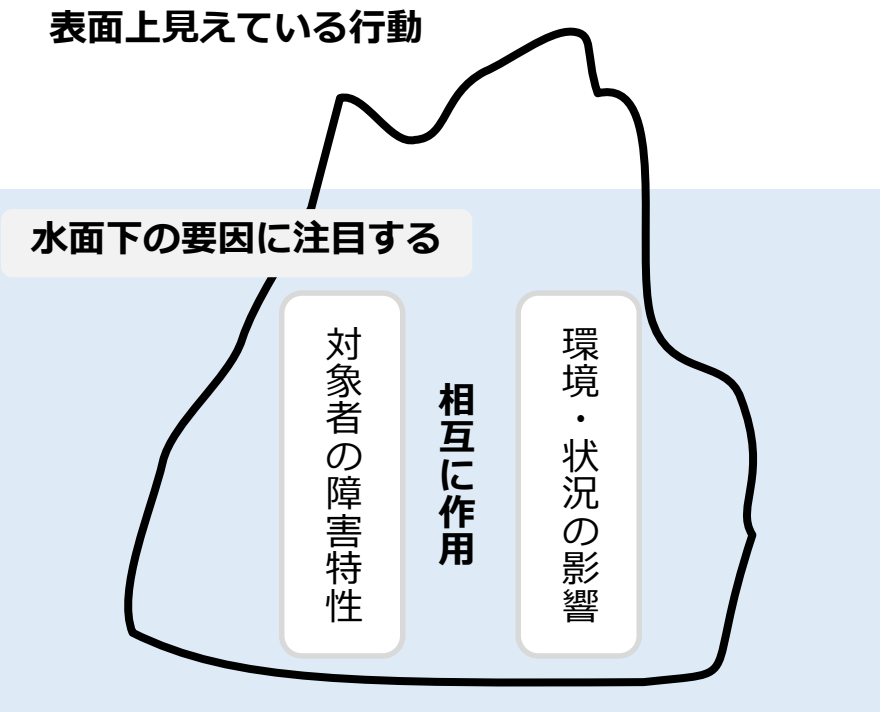
生じている問題・生じうるリスクのある場面で、「強み」のリストを活かした環境づくり（構造化）の計画を立てる。

ステップ①

①背景の障害特性を推測する｜氷山モデル

行動の背景にある障害特性（生物学的・心理的）を推測し、リストアップします。その際、行動の生起要因のきっかけとなっている環境（本人に影響を及ぼす物、事、人）要因にも留意しましょう。

氷山モデルとは、障害がある人の課題となっている行動を氷山の一角として捉え、氷山の一角に注目するのではなく、その水面下の要因に着目して支援の方法を考えることを意味します。



昼食場面｜障害特性を推測

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

・好きなメニューが出ると、ほかの人のおかずをとって食べてしまう。
・制止すると、誰彼構わず人の腕をつねる、噛みつく（利用者・保護者からの苦情有り）。

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

■特定の感覚が過敏、または鈍い
■結果をかえりみず突然反応してしまう
■全体をとらえて関係性をつかむことが苦手
■ことばを聞いて理解することが苦手

②障害特性を「強み」の表現に変換

③他の場面から「強み」のリスト追加

④「強み」を活かした新たな環境

ステップ②

②障害特性を強みの表現に変換する

苦手なことばかりに注目すると、「苦手なこと（もの）を避ける」支援に偏ってしまいます。リストアップした障害特性を「強み」の表現に変換（リフレーミング）しましょう。 視点を変えることで、強みを活かした支援に繋げやすくなります。

ことばを聞いて理解することが苦手	目で見た情報は理解しやすい
集団で一斉に行動することが苦手	マイペースに課題を完了することができる
抽象的、あいまいなことの理解が苦手	具体的で、はっきりとしたことを好む

ヒントシートを参考にして下さい

昼食場面｜障害特性を強みに変換

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

・好きなメニューが出ると、ほかの人のおかずをとって食べてしまう。
・制止すると、誰彼構わず人の腕をつねる、噛みつく（利用者・保護者からの苦情有り）。

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

■特定の感覚が過敏、または鈍い

■結果をかえりみず突然反応してしまう

■全体をとらえて関係性をつかむことが苦手

■ことばを聞いて理解することが苦手

②障害特性を「強み」の表現に変換

●些細な違いや変化に気がつく、または非常に我慢強い

●興味・関心があるものに、強く注意を向けることができる

●細部に、強く意識を向けることができる

●目で見た情報は理解しやすい

③他の場面から「強み」のリスト追加

④「強み」を活かした新たな環境

ステップ③

③他の場面から「強み」のリストを追加

他の場面の観察から、リストされていない「強み」を加えていきます。

対象者の「強み」を様々な場面、記録から膨らませていきます。

特定の行動上の問題やリスクが推測される場面だけでなく、日常生活全般の様子から、強みのリストを補強していきます。

保護者からの情報

生育歴

生活全般の記録

各種記録

昼食場面｜他の場面から強みを探す

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

・好きなメニューが出ると、ほかの人のおかずをとって食べてしまう。
・制止すると、誰彼構わず人の腕をつねる、噛みつく（利用者・保護者からの苦情有り）。

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

■特定の感覚が過敏、または鈍い
■結果をかえりみず突然反応してしまう
■全体をとらえて関係性をつかむことが苦手
■ことばを聞いて理解することが苦手

②障害特性を「強み」の表現に変換

●些細な違いや変化に気がつく、または非常に我慢強い
●興味・関心があるものに、強く注意を向けることができる
●細部に、強く意識を向けることができる
●目で見た情報は理解しやすい
○一旦学習すると、繰り返し確実に実施する
○好きな活動があり、生活の中で楽しめている

③他の場面から「強み」のリスト追加

○決まったパターンを几帳面に行うことができる：写真と具体物のマッチングができる
○一人で行う作業や自立課題は20分程度集中して取り組む
○一人で楽しめる活動を持っている：余暇グッズ

④「強み」を活かした新たな環境

ステップ④

④「強み」を活かした新たな環境

生じている問題・生じうるリスクのある場面で、「強み」のリストを活かした環境づくり（構造化）の計画を立てます。

構造化とは、その場の状況に最も適切な意味と見通しを明確に伝え、安心できてかつ自立的に行動ができるよう環境（もの、事、人）を調整することです。

物理的構造化	スケジュール	ワークシステム	決まった手順や習慣	視覚的構造化
・物理的、視覚的に分かりやすい境界を作る ・活動と場所の1対1の対応 ・妨害刺激の除去	どんな活動があるのか、その流れがどうなっているのかを視覚的に示す方法	自立的活動をする為の情報を伝える方法 ①何をするか ②どれぐらいするか ③どうなったら終わるのか ④終わったら次に何をするか	・いつも同じ手順で課題、活動を行う ・習慣化することで、普段の生活を安定したものにする ・ルーチンを使って繰り返している内に学習する	“見て分かる”ようにして理解しやすくする ①視覚的提示 ②視覚的明瞭化 ③視覚的組織化

昼食場面｜強みを活かし新たな環境

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

・好きなメニューが出ると、ほかの人のおかずをとって食べてしまう。
・制止すると、誰彼構わず人の腕をつねる、噛みつく（利用者・保護者からの苦情有り）。

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

■特定の感覚が過敏、または鈍い
■結果をかえりみず突然反応してしまう
■全体をとらえて関係性をつかむことが苦手
■ことばを聞いて理解することが苦手

②障害特性を「強み」の表現に変換

●些細な違いや変化に気がつく、または非常に我慢強い
●興味・関心があるものに、強く注意を向けることができる
●細部に、強く意識を向けることができる
●目で見た情報は理解しやすい
○一旦学習すると、繰り返し確実に実施する
○好きな活動があり、生活の中で楽しめている

③他の場面から「強み」のリスト追加

○決まったパターンを几帳面に行うことができる：写真と具体物のマッチングができる
○一人で行う作業や自立課題は20分程度集中して取り組む
○一人で楽しめる活動を持っている：余暇グッズ

④「強み」を活かした新たな環境

・11:35に午前の活動を終了。スケジュール確認後、食堂へ移動（他の利用者より５分前には入室）。
・トレーにセットされた昼食をトレーごと机に運び、テープで囲ってある場所にトレーを置く（トレーの写真も貼って有る）。
・食後トレーごと下膳し、静養室にてスケジュール確認。その後余暇を過ごす（時間に併せて、DVD又はCDの視聴）。

昼食場面｜支援手順書（例）

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

⇩

②障害特性を「強み」の表現に変換

⇨

③他の場面から「強み」のリスト追加

⇨

④「強み」を活かした新たな環境

・11:35に午前の活動を終了。スケジュール確認後、食堂へ移動（他の利用者より５分前には入室）。
・トレーにセットされた昼食をトレーごと机に運び、テープで囲ってある場所にトレーを置く（トレーの写真も貼って有る）。
・食後トレーごと下膳し、静養室にてスケジュール確認。その後余暇を過ごす（時間に併せて、DVD又はCDの視聴）。

⇩

時間	活動	サービス手順
11:35-12:45	昼食	【スケジュール５：昼食】 １．静養室（スケジュール確認） →　２．食堂（配膳台からトレーにセットされた昼食をとる） →　３．テープで囲ってある場所にトレーを置く →　４．食事をとる →　５．下膳（トレーごと、下膳場所に持って行く）
	昼休み	→　６．静養室（スケジュール確認　→休憩）

支援の手順書｜作成のポイント

【各活動の時間】

一つ一つの活動の、持続可能な時間を把握しておくことは大切なポイントになります。その中で、少し余裕を持って次の活動に移る活動を設定してみましょう

【強みの考え方】

現在、対象者が既に獲得している「強み」を把握し、積極的に活かすよう、意識してみましょう

困難な状況や課題となっている行動がある場面では、苦手なことを克服するという考え方よりも、現実的に考え、対象者や周囲が「どう対処するか」「その場面を、どう不快ではなく（楽しく）、又は安全に過ごすか」という視点で考えてみましょう

まとめ｜「４つのプロセス」の作成

観察・予測｜日々の生活状況やアセスメントシート等から情報を収集

生じている問題・生じうるリスクを具体的に記す

① 背景の障害特性を推測｜氷山モデル

行動の背景にある障害特性（生物学的・心理的）と環境要因を推測し、リストアップする。

② 障害特性を「強み」の表現に変換

リストアップした障害特性を「強み」の表現に変換する 。

③ 他の場面から「強み」のリスト追加

他の場面の観察から、リストされていない「強み」を加える。

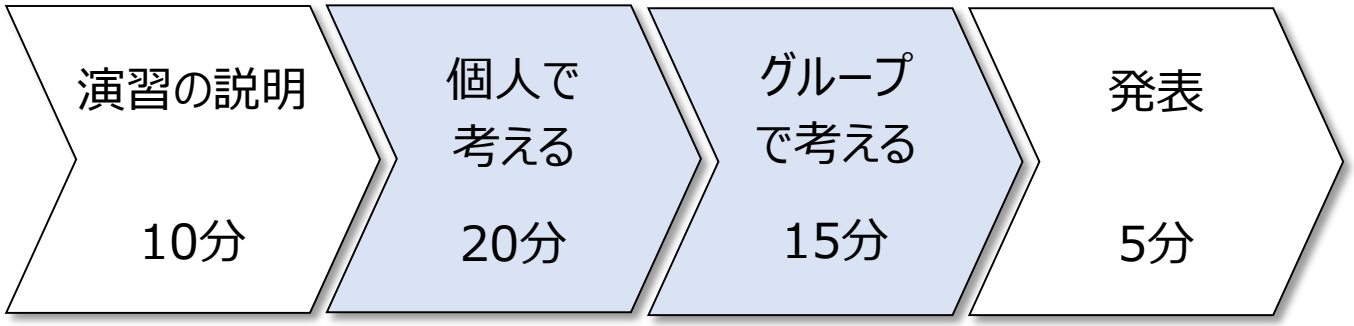
④ 「強み」を活かした新たな環境

生じている問題・生じうるリスクのある場面で、「強み」のリストを活かした環境づくり（構造化）の計画を立てる。

演習②｜班別活動の新たな環境を考える

- 「司会」を⑤、「記録」を④、「発表」を⑥の人が担当します。
- エピソード「これまでの作業、これからの作業」を読み、４つのプロセスを整理します。
  - １）③他の場面から「強み」のリスト追加
  - ２）②に③の内容を追加
  - ３）④「強み」を活かした新たな環境を作成

【演習の流れ】



これまでの作業、これからの作業

- 今年の４月から約半年間、のぞむさんはDVDの表面に貼ってあるシール（新作、準新作）を剥がす作業を行っていました。最初の４ヶ月は、シールを剥がすことや、剥がした後のシールやケースの置き場所が分かりませんでした。また剥がし終えたカバーは机右横の段ボール箱に入れてもらうようにしていたのですが、元の場所にカバーを戻してしまうことも度々ありました。

- 分かりやすいようにと１日分の作業を本人の机上に置いたり、タイマーを設置し鳴ったら終わり（45分間でセット）としていました。しかし、タイマーが鳴る前から中断したり、逆にタイマーが鳴っても終われないことがありました（声かけしても終われない）。そんな日は大きな声を出し、部屋から飛び出してしまうことがよくありました。

- 一番困ったのは、間違えていたときに教えてあげたり（ときには注意も）、終われなかったさいに声かけすると、大声を出したり、掴みかかってくることでした。でも同じ教えてあげるのでも、黙って手本を見せていたときは怒らず、じっと職員の手元を見ていました（･･･そういえば、それ以降作業の間違いがなくなったかも）。

- 少しずつ手順を覚え作業ができるようになってきたのぞむさんですが、半年を過ぎても作業が中断したり、又は終われないということが続いています。もう一度のぞむさんの特性を踏まえ、強みを活かした支援内容を考えてみたいと思います。

これまでの支援手順書

右は、「これまで」の支援手順書です。

「これまでの作業、これからの作業」のエピソードの通り、従来の支援手順では課題があります。

これから４つのプロセスを整理し、「強み」を活かした新たな環境、そして新たな支援手順書を作成します。

時間	活動	サービス手順
9:30-10:00	来所	【スケジュール１：朝の準備】 ・静養室でスケジュール確認 ・静養室で着替えて作業室へ
10:00-10:45	**班別活動**	**【スケジュール2：DVD組み立て】**
10:45-11:00	お茶休憩	【スケジュール3：お茶休憩】
11:00-11:45	班別活動	【スケジュール4：DVD組み立て】
11:45-12:45	昼食昼休み	【スケジュール5：昼食】
12:45-13:30	散歩	【スケジュール6：散歩】
13:30-14:35	自立課題	【スケジュール7：自立課題】
14:35-15:00	帰り	【スケジュール8：帰宅】

演習②｜班別活動の新たな環境を考える

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

・最初の4ヶ月間は、作業工程（方法や場所）を正確に理解できていない（現在も同様）
・声かけや注意をすると、大きな声を出したり、掴みかかってくることがある
・作業が終われないことがある

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

・抽象的、あいまいなことの理解が苦手
・ことばを聞いて理解することが苦手
・「いつ終わる」かを理解するのが苦手
・全体をとらえて関係性をつかむことが苦手

②障害特性を「強み」の表現に変換

●具体的ではっきりしたことを好む
●目で見た情報は理解しやすい
●決められたことをやり続けようとする
●細部に、強く意識を向けることができる
○
○
○

③他の場面から「強み」のリスト追加

○
○
○

④「強み」を活かした新たな環境

演習②｜班別活動の新たな環境を考える

20分 【各自】

1. エピソードと４つのプロセスをもう一度確認し、プロセスの③、②、④をワークシート（WS-2）へ記入。

15分 【グループ】

2. １）各自グループ内で発表（１人1.5分程度で発表）
   ２）グループで、１つを選ぶ

5分 【発表】

3. ２～３のグループに発表してもらいます。

演習②｜発表（５分）

２～３グループに発表してもらいます。発表者はグループで話し合われた内容を全体に報告してください。

- ①他の場面から「強み」のリスト追加、②「強み」を活かした新たな環境、の順で報告して下さい
- どのような点に悩みましたか？

演習②｜新たな環境（例）

生じている問題、生じうるリスクを具体的に記載

・最初の4ヶ月間は、作業工程（方法や場所）を正確に理解できていない（現在も同様）
・声かけや注意をすると、大きな声を出したり、掴みかかってくることがある
・作業が終われないことがある

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

・抽象的、あいまいなことの理解が苦手
・ことばを聞いて理解することが苦手
・「いつ終わる」かを理解するのが苦手
・全体をとらえて関係性をつかむことが苦手

②障害特性を「強み」の表現に変換

●具体的ではっきりしたことを好む
●目で見た情報は理解しやすい
●決められたことをやり続けようとする
●細部に、強く意識を向けることができる
○手本、モデルを集中してみることができる
○20分程度、自立課題や作業を一人で行える
○写真を使った指示で、活動を理解できる

③他の場面から「強み」のリスト追加

○手本、モデルを集中してみることが出来る
○一人で行う作業や自立課題は20分程度集中して取り組む
○写真を使った指示で活動がいくつか理解できる

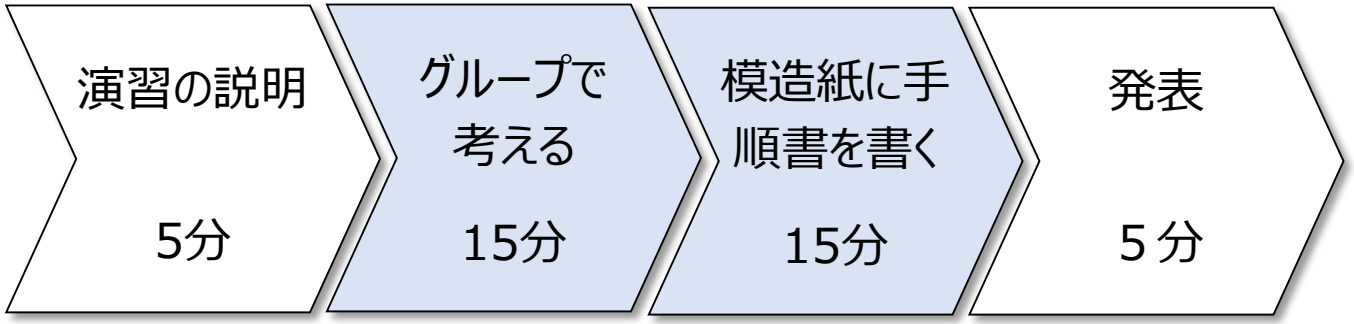
④「強み」を活かした新たな環境

・集中持続確実な15分を作業の基本時間とする
　→　スケジュールに休憩を追加
・修正を行う場合、モデル（望ましい方法）を見せる。
・終わりを「課題がなくなったら終わり＝量」にし、完成品を入れる箱も机上に置き、完成品の写真を箱に貼り入れるべき場所を明確にする

演習③｜班別活動の支援手順書を作成する

- 「司会」を②、「記録」を⑥、「発表」を⑤の人が担当します。
- 「強み」を活かした新たな環境を基に、班別活動時の支援手順書を作成します。

【演習の流れ】



演習③｜班別活動の支援手順を考える

15分 【グループ】

1. 班別活動時の「強み」を活かした新たな環境から支援手順書を考える。

15分 【グループ】

2. １）模造紙に、考えた支援手順書を記載する

5分 【発表】

3. ２～３のグループに発表してもらいます。

演習③｜発表（５分）

２～３グループに発表してもらいます。発表者はグループで話し合われた内容を全体に報告してください。

- 支援手順書の内容を報告して下さい
- どのような点に悩みましたか？
- どのような点を工夫しましたか？

演習③｜支援手順書（例）

①背景の障害特性を推測｜氷山モデル

⇩

②障害特性を「強み」の表現に変換

③他の場面から「強み」のリスト追加

④「強み」を活かした新たな環境

・集中持続確実な15分を作業の基本時間とする
　→　スケジュールに休憩を追加
・修正を行う場合、モデル（望ましい方法）を見せる。
・終わりを「課題がなくなったら終わり＝量」にし、完成品を入れる箱も机上に置き、完成品の写真を箱に貼り入れるべき場所を明確にする

⇩

時間	活動	サービス手順（案１）	サービス手順（案２）
10:00-10:45	班別活動	【スケジュール２：DVD組み立て×2回】 １．作業室（作業15分） →　２．静養室（休憩10分） →　３．アラーム →　４．静養室（スケジュール） →　５．作業室（作業15分）	【スケジュール２：DVD組み立て×2回】 １．作業室（作業15分） →　２．静養室（休憩10分） →　３．アラーム →　４．トイレ →　５．静養室（スケジュール） →　６．作業室（作業15分）

まとめ｜支援手順書の作成プロセス

観察・予測｜日々の生活状況やアセスメントシート等から情報を収集

生じている問題・生じうるリスクを具体的に記す

① 背景の障害特性を推測｜氷山モデル

行動の背景にある障害特性（生物学的・心理的）と環境要因を推測し、リストアップする。

② 障害特性を「強み」の表現に変換

リストアップした障害特性を「強み」の表現に変換する 。

③ 他の場面から「強み」のリスト追加

他の場面の観察から、リストされていない「強み」を加える。

④ 「強み」を活かした新たな環境

生じている問題・生じうるリスクのある場面で、「強み」のリストを活かした環境づくり（構造化）の計画を立てる。

まとめ｜支援手順書の更新

■来所場面の支援手順書の変更経過（のぞむさん）

上：はじめに作った支援手順書

中：活動の切替えは静養室（スケジュール確認）と変更

下：着替え時、他利用者への他害の恐れが生じたため、場所を変更。また休憩の終わりもアラーム使用に変更

■対象者の状態に即し、根拠に基づいた支援を、支援者が統一しやすいように、その都度、更新が大切。

時間	活動	サービス手順
9:30-10:00	**来所**	**【スケジュール１：朝の準備】** **・静養室でスケジュール確認** **・ロッカー室で着替えて作業室へ**
10:00-10:45	班別	【スケジュール2：DVD組み立て×２回】

10月18日（金）

時間	活動	サービス手順
9:30-10:00	**来所**	**【スケジュール１：朝の準備】** **静養室（スケジュール）→ロッカー室（着替え）** **→静養室（スケジュール）→作業室**
10:00-10:45	班別	【スケジュール2：DVD組み立て×２回】

10月24日（木）

時間	活動	サービス手順
9:30-10:00	**来所**	**【スケジュール１：朝の準備】** **静養室（スケジュール）→静養室（着替え）** **→静養室（休憩）→アラーム（15分）→作業室**
10:00-10:45	班別	【スケジュール2：DVD組み立て×２回】

まとめ｜作成のプロセスが重要

【対応策だけでなく根拠を整理する】

- 行動の背景や理由を確認する
- 適切な引き継ぎだけでなく応用の可能性

【今後の暮らしを考える手がかり】

- 支援者側からの問題が生じなければよいか？
- 暮らしを支える（広げる）積極的な支援へ（予防）
- 理解を助け自立を支援する（構造化）

  ※今できることを多くの場面で活用する

【事業所のサービスとしてチームで支援する】

参考文献

- 藤村出、服巻智子、諏訪利明、内山登紀夫、安倍陽子、鈴木信五「自閉症のひとたちへの援助システム」朝日新聞厚生文化事業団，1999
- 佐々木正美、内山登紀夫、村松陽子「自閉症の人たちを支援するということ」朝日新聞厚生文化事業団，2001
- ノースカロライナ大学医学部精神科TEACCH部／服巻繁「見える形でわかりやすく―TEACCHにおける視覚的構造化と自立課題」エンパワメント研究所，2004
- 佐々木正美／宮原一郎「自閉症児のための絵で見る構造化」学習研究社（学研），2004
- 佐々木正美「自閉症のすべてがわかる本」講談社，2006
- 水野敦之「「気づき」と「できる」から始めるフレームワークを活用した自閉症支援」エンパワメント研究所，2011